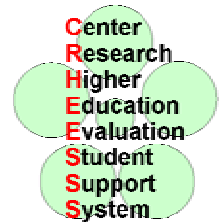


# 週刊センターニュース No.51



第 51 号 (2005 年 3 月 7 日) 毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## 共同学習会のご案内

第 64 回 日時: 3 月 9 日 (水) 16:00 ~ 17:30

会場: 総合教育棟南棟 1 階 小会議室

題目: 「新しいインターンシップのかたち」

報告者: 神谷浩夫教授 (文学部)

趣旨: 東京で 2 月に開催された「インターンシップ推進フォーラム」に出席された神谷先生より、インターンシップの今日的動向を中心に報告していただく。

第 65 回 日時: 3 月 10 日 (木) 16:20 ~ 17:50

会場: 総合教育棟南棟 2 階 大会議室

報告者: 堀井祐介 (大学教育開発・支援センター)

題目: 「21 世紀の大学教育を拓く - みちのく GP 交流シンポジウム - 」参加報告

## 専門職大学院研究会のご案内

第 1 回 日時: 3 月 17 日 (木) 14:30 ~ 16:00

会場: 総合教育棟南棟 2 階 大会議室

テーマ: 「アメリカにおける教員資質向上策について - 日本の中教審論議を踏まえて - 」

報告者: 八尾坂 修 (九州大学人間環境学研究院 教授)

## 大学教育学会 2004 年度課題研究集会参加報告 (その 3)

今回は、2004 年 12 月 4 日 (土)、5 日 (日) に立教大学で開催された大学教育学会 2004 年度課題研究集会でのシンポジウム III 「教養教育の社会的役割と評価 - 「高等教育のグランドデザイン」議論を見据えて - 」について簡単に報告させていただきます。

シンポジウム II は、以下の 3 氏による報告の後、指定討論者からのコメントがあり、その後ディスカッションが行われた。

- ・ 国立大学財務・経営センター 天野郁夫氏 「わが国の高等教育の将来像 (審議の概要)」(グランドデザイン) は教養教育について何を語っているのか
- ・ 広島大学 羽田貴史氏 「高等教育の「グランドデザイン」とユニバーサル段階の大学教育の課題」
- ・ NPO 法人学術研究ネット 後藤邦夫氏 「教養教育再建の課題と「内容評価」確立への課題」

天野氏は、このシンポジウムのテーマである「高等教育のグランドデザイン」(以下「グランドデザイン」)をまとめた中教審大学分科会委員として、また、一人の高等教育研究者として、両方の立場から、この「グランドデザイン」について以下のような報告を行われた。「グランドデザイン」において、「教養教育」については、分散的に言及されているに過ぎず、集中的検討・審議はなされていない。そういう中、「教養教育」については、漠然とした、しかし強い危機感がある。それらの危機感の背景にあるものをまとめると以下の 9 点があげられる。(1)一般教育課程・教養部廃止への反省 (専門・職業教育の支配、共通教育は教養教育か)。(2)学力低下の社会問題化 (教養以前の「常識」の貧困化)。(3)「大学全入」時代の到来と選抜システムの変質 (5 教科 7 目への回帰志向高等普通教育とは何か)。(4)職業主義の浸透 (学部教育とポセーションナリズム、資格志向・実用性志向、ダブルスクール現象)。(5)専門職大学院制度の発足 (学部教育と大学院教育との関係、何のための学部教育か、専門教育と専門職業教育の位置)。(6)学士課程教育という考え方 (プログラムとしての学部教育、構成要件はなにか)。(7)専門学校の発展とライバル化 (短期大学の衰退、大学と専門学校の制度的境界は、編入制と 4 年制専門学校の出現)。(8)人文・社会系学部の変質 (人間系専門職業の登場と発展、社会福祉士・臨床心理士・社会調査士、栄養士・保育士・教員、専門職大学院の出現と社会系学部教育の問い直し、教養教育

か、専門基礎教育か、専門教育か)。 (9)学習の生涯化と学部教育(高等普通教育か、専門・職業教育か、4つのC Communication, Critical Thinking, Creativity, Continuous learning)

これらを踏まえて、「誰が「教養教育」を再創造するのか」という視点から、以下の点について問題提起された。審議会の限界と期待過剰/学士課程教育の編成の自由化の意味/大学と大学人の役割/研究大学は「教養教育」のモデルを示せるか/人文・社会系単科大学のリベラル・アーツ・カレッジ化は可能か/評価機関は「望ましい教養教育像」を示せるか。

羽田氏は、OECDの報告書(On the Edge: Securing a Sustainable Future for Higher Education, 2004)において、政府と大学の関係の変化に言及されていると述べた後、2003年のイギリスの高等教育に関する白書(The Future of Higher Education)と今回の日本の「グランドデザイン」とを比較された。

イギリス	日本
成果・学制志向	制度・機関志向
理念・価値の実現	状況への対応(当為性と作為性の欠落)
徹底した財政方策	あいまいな財政責任
リアルな現状認識	動向による説明

こういった違いが生じる理由として、日本の高等教育政策の外枠が、今回の「高等教育の「グランドデザイン」とは別のところ(総合学会議、財政制度審議会など)で形作られている点を指摘された。また、「グランドデザイン」で述べられている大学の機能分化論についても、「現実の大学政策は、再編統合を含む機能統合による生き残りを模索している/教養教育・共通教育-学士課程教育-大学院教育の循環が重要である/大学教員の再生産の仕組み(教養担当教員が将来の教養担当教員を生み出す)が問題である/教養教育と研究の分離が懸念される」といった点を指摘された。

後藤氏は、「1.「知識社会」のゆくえと大学の役割として、現在、Second Academic Revolution, Entrepreneurial Universityとして大学に関するパラダイム・シフトが語られており、「知識社会」においては、大学により主体的な活動が求められている。2.学士課程と学生の存在および教養教育の位置に関して、「グランドデザイン」等で個別学問分野の教育とは一線を画す形で教養教育の必要性が述べられている点が重要である。3.教養教育の内容と評価という支店からは、教養教育は、かつてのエリート型高等教育において、相互の切磋琢磨を通して身につけてきた「隠れたカリキュラム」に委ねられていたものであり、パラダイムが確立している個々の専門分野とは異なる。そのため、当然、評価手法も異なってくる。「評価団」と「教授団」両方が出席し、討論するような形での公開セミナーを通しての評価が必要」という報告を行われた。

3氏の報告の後、指定討論者の山岸駿介氏(財団法人日本私学教育研究所)が、「教養教育とは、一部の大学人の研究対象、経済人の一部の人たちのおもちゃ(教養教育が無くなって困る人がどれくらいいるのか)/中教審での取り扱いに頼るところに問題がある(中教審が答えを出すと大変)/学長が教養教育の理想を書いている大学でさえ、その理想は実現されていない/教養教育は学問から外す方がいいのでは(事務にいる任せることが可能)/教養教育は全学の教員が全体像を把握していないとダメ/教養教育はカリキュラムとして議論すべき」といったコメントを述べられた。

また、その後のディスカッションでは、「教養教育は専門分野別評価期間がどのように扱えるのか/教養とは、批判的な学習力、生涯にわたる力である/現時点では、教養教育は一つの機能としてきちんと分化していない/現代GPのように特定の大学へお金を振り分けるのはどうか。学会レベルで各専門分野別にどのような教育が望ましいのかを研究させるために資金を配分するほうがいいのか/専門職というカテゴリーのない社会で多くの専門職大学院を作っている/大学間競争だけがいいことではない。ニュージーランドでは失敗し、方向転換している。イギリスでも連携を模索している/教育は一義的な閉鎖モデルではない。外部のさまざまな要因の影響を受けている/大学とは何か、そこでの教育とは何か、についてもっと本格的に議論すべき」といった発言があった。

以上のように、このシンポジウムでは、現代の大学教育における教養教育は、非常に重要ではあるが、現時点では非常に多くの問題点を抱えているということが明らかになった。また、「大学とは」という大きなテーマについても、きちんと正面から議論していく必要があるということを強く認識させられた。現在、様々な面から大学改革が進められているが、それら実際の改革作業を本当に実りのあるものとするためには、理論的枠組みや理念などに関して大学人の意識を統一しておく必要があるのではないだろうか。そのための方策についても、今後考えていきたいと思った。(文責 堀井)